

3 実施

3-1 KUG実施にあたっての前提

KUGは、5グループに分かれて実施した。前回は、4グループ（A・Bグループ：学生、C・Dグループ：職員）として、学生と職員とに属性を分類して行っていたが、今回は、学生・教職員・千代田区在勤者等、属性による分類はせず、混成グループとした。また進行役は近藤が務めた。

当日は配布資料として、スライド資料、KUG研究対象者への説明文書、同意書、写真撮影承諾書を参加者にお渡しし、同意書および写真撮影承諾書を回収した。

またKUG実施にあたっては、防災の日にちなんで、1923年9月1日に発生した関東大地震についてのミニ講義をスライドを交えて行なった。また帰宅困難者支援とは何か？ということなど、事前に知っておくべきことについてのレクチャーを近藤が行った（図4～6）。



図4 KUG 会場風景(関東大震災についてのミニ講義)

防災の日— 9月1日

- 1960年に制定された防災の啓発を目的とする日。
1923年の関東大震災が起きた日に由来し、毎年9月1日とされている。



「神田駅プラットフォームより須田町神保町方面を望む」
（『震災絵葉書』より）大正12年（1923）

図5 関東大震災についてのレクチャーライド

共立女子大学が帰宅困難者受入施設になったら…



* 街の特徴を考えてみよう

- 神保町は、東京23区のだ真ん中に位置し、靖国通りと白山通りが交わる神保町交差点を中心に広がる街。
- 古書店や新刊書店が多く集まる街。
- 出版社をはじめ、たくさんの企業がある。
- 古書店だけではなく、純喫茶、カレー屋さん、スポーツ用品街、中華街などもあり、多くの観光客が訪れる街。
- その他、街の特徴、どんな人たちがいる街か考えてみよう。



図6 KUG 実施にあたってのレクチャーライド

3-2 施設見学

約 30 分程度、帰宅困難者受入場所に指定されている施設（図 7）、および備蓄倉庫の見学を行った（図 8）。千代田区に申請している帰宅困難者の受入場所は本学 2 号館の地下 1 階、1 階、および 2 階の一部である。



図7 帰宅困難者受入施設(地下1階)の見学



図8 備蓄倉庫(1階)の見学

3-3 KUG実施

KUG実施にあたっては、スムーズに進められるように、その趣旨、進め方についての説明をスライドを用いて行った。手順としては、(1) 役割分担の確認、(2) 受入基本方針の確認(図9)、(3) 帰宅困難者を受け入れる、(4) イベントに対応する、(5) 施設を閉鎖する、という一連の流れの説明を行った。イベントについては、進行役がイベントカードを任意に選択し、マイクで一斉にアナウンスするという方法をとった。

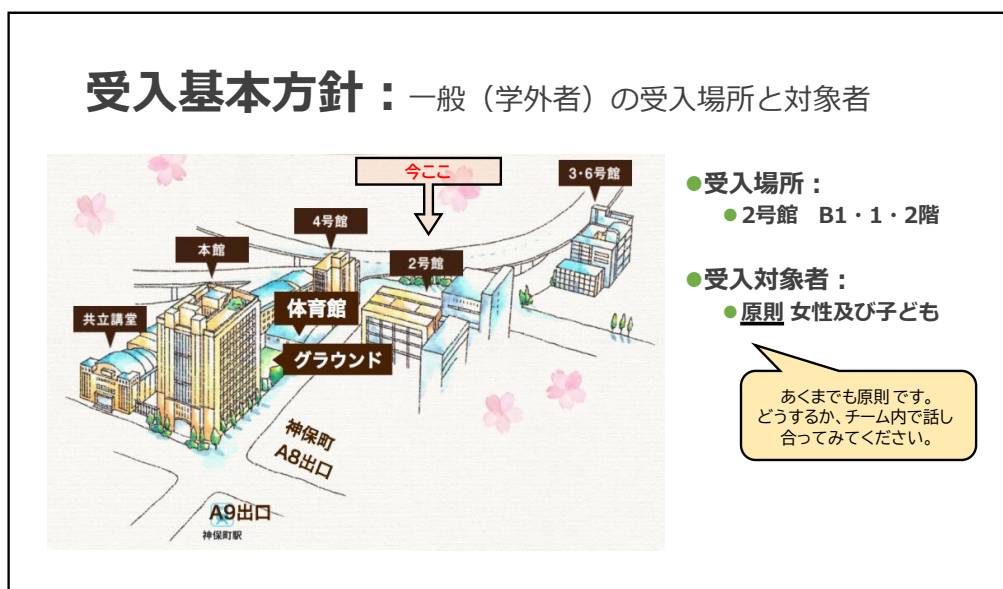


図9 受入基本方針の確認



図10 KUG実施の様子



図 11 KUG実施後のふりかえり(B グループ発表)



図 12 KUG実施後のふりかえり(E グループ発表)

4. まとめ

本学においてのKUG実施（図 10）は今回が2回目であった。前回よりはスムーズに進行できたが、課題も多かったといえる。実施後のアンケートの質問「KUG について、改善した方が良かった点について自由にあげてください。」については、次のような意見があった。

- * 帰宅困難者一人一人の情報がもう少し必要だと思った。例：75 歳だが元気はつらつ等。
- * 防災マップやどのような行動をとるべきなのかをまとめた資料を配っていただけると嬉しいと感じた。
- * なるべくグルーピングに偏りがでないとよいかと思いました。また、振り返りの時間にもう少し余裕があると良かったなと思いますが、総じて学びの多い有意義な時間でした。ありがとうございました。
- * スピードよく捌くことの重要性も冒頭に伝えられればと思った。

- *時間をもう少し長く取っても良いと思った。
- *グループで考えた方法で支援を実践するグループワークを行ってみたいと思った
- *有意義な会なので、今後も継続していただけるとありがたいと思います。
- *KUGにより時間を当てるべきだと思いました。
- *現実的には次から次へとトラブルや帰宅困難者からの要望、余震で一部崩壊などがあると思いますので、途中途中で入れられるトラブルについて、もっと多めにしたほうが良いのかと思いました。

いずれも有意義な意見である。やはりKUGの開始に至るまで時間が押してしまい、実施および振り返りの時間を短縮することとなってしまうことが大きな課題といえる。また、「帰宅困難者一人一人の情報がもう少し必要」、あるいは「防災マップやどのような行動をとるべきなのかをまとめた資料が必要」という意見は、参加してみて初めて得ることのできることであろう。各チームに配られた、「帰宅困難者カード」、「イベントカード」のバージョンアップを含めて、ソフト面のさらなる充実も必要だと感じる。また、KUGをグループで話し合いながら実施することに大きな意義があるわけだが、実施後のふりかえりの時間を十分にとり、フィードバックを充実させることが、重要である。各グループでのふりかえりにおいて、活発な意見交換がなされたことから思料される(図13)。

実施場所については、前回同様、2号館2階コミュニケーションギャラリー(9面パネル)での実施となったが、この場所は、帰宅困難者の受入スペースでもあることから、実際に受入を行うときのイメージがしやすいという大きなメリットがあったといえる。

2024年は、最大震度7の能登半島地震とともに幕を開け、東方沖地震も頻発している。いつ起こるか分からない自然災害は決してひとごとではない。今後も継続的にKUGを実施し、学生および教職員の防災意識を高めるとともに、帰宅困難者支援への理解を深めていきたい。

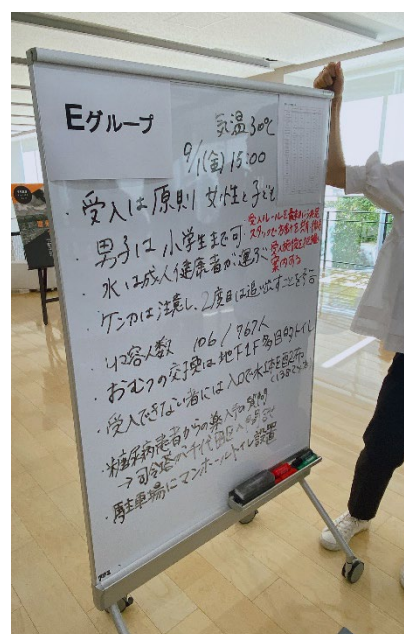


図13 KUG実施後のふりかえり

【参考文献】

- ・廣井悠[編・著]，中野明安[著] (2013)：これだけはやっておきたい 帰宅困難者対策 Q&A，清文社
- ・廣井悠[単著] (2013)：災害であなたが帰宅困難になった時のために，清文社
- ・中林一樹[監修] (2012)：大地震あなたのまちの東京危険度マップ，朝日出版社
- ・大地震に備える帰宅支援マップ[首都圏版] (2022)，昭文社
- ・廣井悠・黒目剛・新藤淳 (2015) 帰宅困難者支援施設運営ゲームの開発に関する研究，東日本大震災特別論文集 No. 4, 67-70.
- ・「STAY for SAFETY『帰さない』選択が、みんなを守る」(東京都総務局総合防災部チャンネル 2023. 3. 3)
<https://www.youtube.com/watch?v=xjsaUKodDQ> (参照年月日：2024. 3. 1)

第6節 大妻女子大学において実施されたKUGの報告

堀 洋元（大妻女子大学 人間関係学部）

1. はじめに

本学をはじめ、本共同事業を行っている5大学（法政大学、二松学舎大学、東京家政学院大学、大妻女子大学、共立女子大学；締結順に記載）はいずれも千代田区と大規模災害時における協力体制に関する基本協定を締結しており、①学生ボランティアの育成、②地域住民および帰宅困難者等への一時的な施設の提供、③大学施設に収容した被災者への備蓄物資の提供を行うための備えを進める必要がある。

そこで本共同事業では、とくに②についてKUG（帰宅困難者支援施設運営ゲーム）を図上演習ツールとして活用し、各大学でKUGを実施しデータを蓄積してきた。昨年度実施した学生版KUGでは、実施内容（参加者がプログラム全般を十分に理解して臨むこと）や実施するインストラクター養成の必要性、参加者が継続してKUGに参加することの意義、などが改善点として指摘されており、それらを踏まえて、今年度は学生、教職員に加えて地域住民が参加するKUGを実施した。

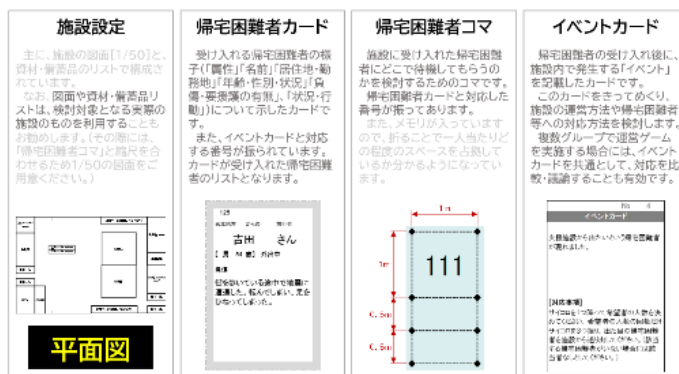
本学では2024年2月21日にKUGを地域版として実施した。以下の項で報告する実施内容は、昨年度学生版として実施した内容をもとに改善点を反映する形で構成した。実施には東京大学廣井研究室とSONPO リスクマネジメント株式会社により開発されたKUG（Ver. 1）による基本キット、フロアシート（平面図）を使用し、実施マニュアルをアレンジして、“地域版”KUGとして実施可能なフォーマットを作成した。本節では、本学で実施したKUGの準備から実施に至るまでの概要を報告する。

2. KUGの実施準備

KUG キット 実施に際しては、廣井・黒目・新藤（2015）によるオリジナルのKUG キット（イベントカード（32枚）、帰宅困難者カード（216枚）・帰宅困難者コマ（216人分）、ミニチュア看板類、サイコロなどのアイテム；図4-6-1）に加えて、図面シートは実際に本学が学外の帰宅困難者用に

KUGについて①使用するアイテム

KUGは、主に次の4つのアイテムで構成されています。



27

東京大学廣井研究室、SONPO-R&D

図4-6-1 使用するアイテムおよび帰宅困難者カード

（東京大学廣井研究室およびSONPO リスクマネジメント株式会社が作成したものを使用した）

想定している教室等のA0サイズ大の図面（平面図）を布製のフロアシートを準備した（図4-6-2）。本学では①本館地下1階（1枚）、②大妻講堂の3フロア（3枚）の計4枚を作成した。図面に薄いオレンジで塗りつぶされた部分が帰宅困難者を受け入れるための施設（教室・アリーナ等）となっている。

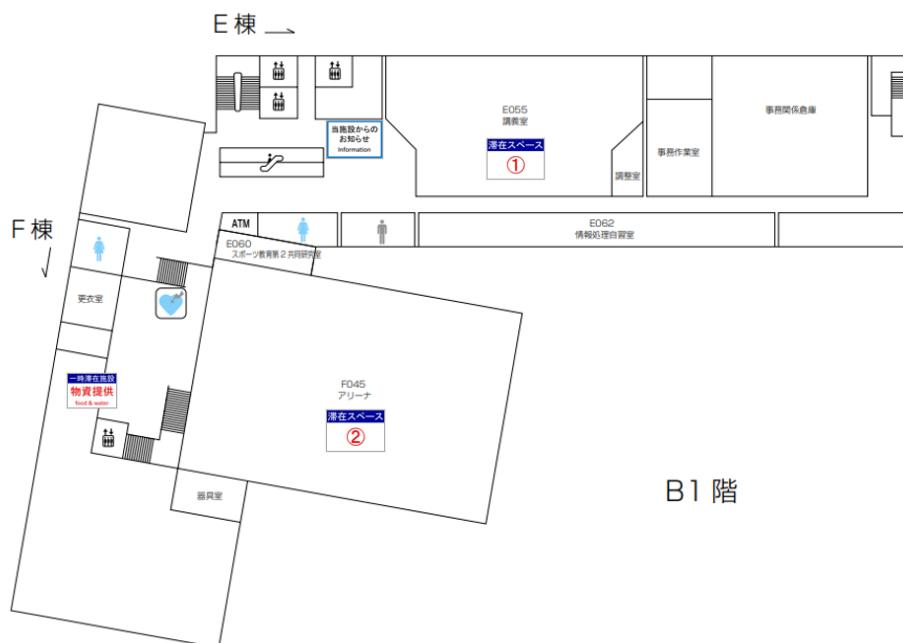


図4-6-2 使用したフロアシート(上)と本館地下1階の平面図(下)

下の平面図①と②が帰宅困難者を受け入れるための施設となっている。

区から提供された物資一覧 備蓄品一覧は本学が千代田区から委託された備蓄（学外の帰宅困難者

用)を用意した。備蓄品一覧は最新版を学内部署から調達したものを使用した。この一覧には、本学における帰宅困難者一時避難施設名および受入対象者、収容可能人数、使用面積が、さらには提供物資(水や食料、備品など)が記載されていた。

KUG 実施のための道具 グループ内での取り組みをインストラクターなどに“見える化”するため、付箋(2種類)、筆記用具(サインペン、マーカー)、ホワイトボードを用意した。イベントカードに対する決定事項を記録するために、10センチ四方の付せんをやスマートフォン大の大きめの付せんを用意した。ホワイトボードはふりかえりの際に発言内容を記録するために用意した。

3. 大妻女子大学での KUG 実施

実施日時 2024 年 2 月 21 日 13:00~16:00 に行った。

実施場所およびレイアウト 大妻女子大学千代田キャンパスの本館4階にある教室を使用した。授業時には約120名収容可能で、可動式の長机が設置されている(図4-6-3)。

レイアウトは教室前方右側にあるスクリーンにスライド資料を提示した。教室前方の中央に平面図を並べて、参加者が自由に移動しながら施設の平面図を見られるようにした。決定事項を整理するために、話し合いスペース(KUGでは“本部”となる場所)を教室前方の左側に配置した。教室後方は見学者用エリアを設置した。

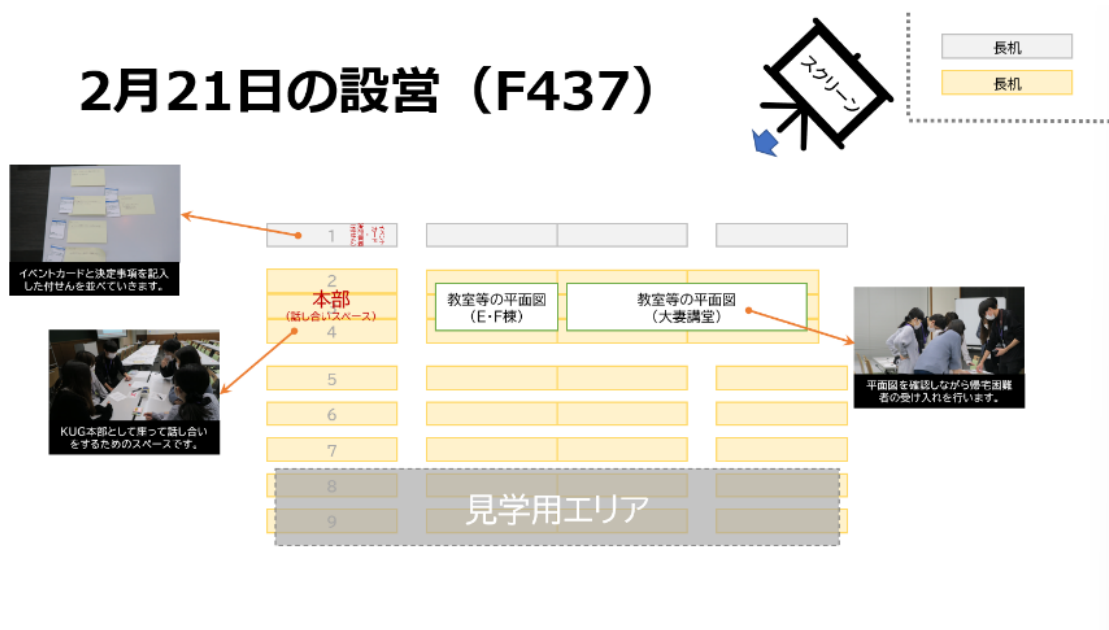


図 4-6-3 実施場所のレイアウト(KUG 実施時)

参加者およびグループ構成 8名(学部学生5名、職員2名、地域住民1名)がKUGに参加した。この8名で1つのグループを構成した。

進行役およびファシリテーター 1名で実施した。進行役(KUGのファシリテーターを兼務)は教室前方で実施について教示し、ファシリテーターとしてグループに関わる場合は適宜話し合いスペース付近に移動して指示を与えた。

実施手続き 図4-6-4は実施当日のタイムスケジュールである。2と3、および5と6の間に休憩を挟み、1から7の順に実施した。所要時間は約180分であった。

今日のスケジュール（2月21日）

	13時					14時					15時				
1. 導入説明	00	20													
2. 施設見学			20	45											
(休憩)															
3. 研究協力の説明						55									
4. KUG説明						00									
5. KUG実施							10				00				
(休憩)															
6. アンケート回答											10				
7. ふりかえり												20			00

図 4-6-4 KUG のタイムスケジュール(大妻女子大学)

1. 導入説明（20 分） スライド資料に基づいて、実施内容について説明を行った。首都直下型地震が起こった際、都心での帰宅困難者等の発生による混乱を防止するため、一斉帰宅抑制の基本原則があることを YouTube 動画（東京都総務局総合防災部, 2023）を交えて説明した。また、東京都が想定している帰宅困難者数、区内大学と千代田区との協定（大規模災害時における協力体制に関する基本協定）について周知を行った（図 4-6-5）。その上で、今回はこの大学が帰宅困難者受入施設になったことを想定し、自分ごととして KUG に参加するよう促した。多くが初対面であるため、自己紹介しながら取り組むよう依頼した。

区内大学と千代田区との協定

大規模災害時における協力体制に関する基本協定

現在、区内の大学には多くの学生が学び、また、それぞれ大規模な施設を有しています。

これらの大学との連携により、学生ボランティアの協力や大学施設を活用することができれば、区の災害対策を進めていくうえで、極めて重要かつ有効な資源となります。

そのため、区内大学に対し、次の3つの項目を主な内容として、協定の締結を進めています。

1. 学生ボランティアの育成
2. 地域住民および帰宅困難者等の被災者への一時的な施設の提供
3. 大学施設に収容した被災者への備蓄物資の提供



千代田区HPより

協定締結状況一覧	
大学名	協定締結日
明治大学	平成16年1月14日
専修大学	平成17年3月29日
法政大学	平成17年3月29日
上智大学	平成18年3月30日
日本大学	平成19年2月1日
二松学舎大学	平成20年3月26日
東京家政学院大学	平成21年3月19日
大妻女子大学	平成23年12月13日
日本歯科大学	平成25年1月25日
共立女子大学	平成25年9月30日
太字は千代田区キャンパスコンソの6大学 (2023年11月～)	

図 4-6-5 千代田区との協定(大規模災害時における協力体制に関する基本協定)

2. 施設見学（25 分） 導入説明に続き、まず教室にて本学における帰宅困難者の受入場所および対象者について、スライドを提示して説明した。その際、KUG で“本部”や“受付”、“受入前の待機スペース”となる場所をあらかじめ教示した。その後、本館地下1階にある帰宅困難者受入予定の教室および体育館アリーナ、担当部署の職員による備蓄倉庫の説明と見学を行った（図4-6-6）。備蓄倉庫の見学では、備蓄品が梱包された段ボールを持ち上げてみるなど、搬出する際のイメージを持ってもらえるようにした。見学後は受入前の待機スペースとして想定する1階エントランスおよび本部として想定する2階食堂を巡回した。



図4-6-6 施設見学の様子(受入場所および備蓄倉庫)

（左上：講義室、右上：アリーナ前スペース、左下：備蓄が入った段ボールを実際に持ち上げてみた様子、右下：非常用洋式便器）

3. 研究協力の説明（5 分） 10 分間の休憩後に再開した。本研究の目的（第4章 第7節を参照）および実施後に行うアンケートの回答方法についてスライドを交えて説明した。

4. KUG の説明（10 分） KUG の進め方は、東京大学廣井研究室およびSONPO リスクマネジメント株式会社が作成した汎用版 KUG の実施用スライドおよび昨年度学生版 KUG として作成したスライドに基づいて説明した。

5. KUG 実施（50 分） KUG は1）から5）のフェーズに沿って行われた。各フェーズともファシリテーターがチームに介入し、適宜説明や指示を行い進められた（図4-6-7）。

KUGの進め方

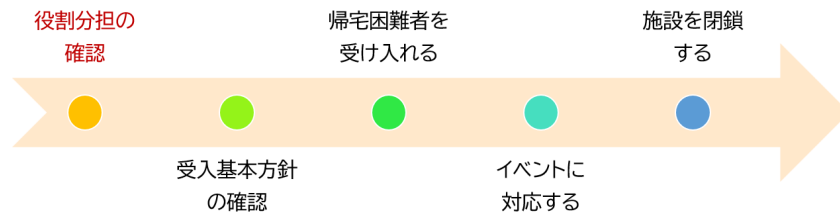


図 4-6-7 KUG の5つのフェーズ

1) 役割分担の確認 本学地震対応マニュアルに記載されている「帰宅困難者対応」の役割分担を参考にして、参加者自身の経験などを踏まえて役割担当を明確化した(図 4-6-8)。例えば、KUG を何回か経験したことがある参加者は総括チームの取りまとめ担当、トイレなど災害時の衛生環境に関心がある参加者は保健衛生チームの総括担当、フットワークの良い参加者は物資提供チームの総括担当、情報の集約が得意な参加者は対応内容の記録担当など、参加者個人の強みを活かしてチーム内での役割を担うこととした。

役割分担の確認

●帰宅困難者対応（大妻女子大学の場合）



大妻女子大学地震対応マニュアル（千代田キャンパス編）p.21

図 4-6-8 今回の KUG で提示した役割分担

2) 受入基本方針の確認 同じく本学地震対応マニュアルに記載されている基本方針（受入対象者は原則、女性及び子ども）に対して、今回はどのような受入方針とするのかを議論し決定した。この決定はチームの判断に委ねた。今回のチームでは原則に沿って女性、子どものほか、家族（男性

も含む)、軽症者、障害者（女性）を受け入れることとし、命に関わるケガを負った人や男性は受け入れない方針とした。

受入基本方針：一般（学外者）の受入場所と対象者

【図表 5】千代田キャンパスの避難所設置位置



受入場所：

- 本館E・F棟
- E055
- 地下1階体育館
- 大妻講堂（2月現在 改修中）

受入対象者：

- 原則 女性及び子ども

※本館（E棟・F棟）：一般（学外）はE055、F棟地下1階体育館を利用する（大妻講堂は安全性の確認が取れる場合に限る）

※原則として、学生・教職員と一般（学外）の避難所設置位置は分離させるが、地震対策室の指示・決定に従う

大妻女子大学地震対応マニュアル（千代田キャンパス編）p.23

図 4-6-9 今回の KUG で提示した受入基本方針

3) 帰宅困難者の受け入れ 受入基本方針が決まったところで、帰宅困難者の受け入れを開始した（図 4-6-10）。1階エントランス付近に帰宅困難者が集まっていると想定し、帰宅困難者カードを1枚ずつめくり、本部としての受付対応を行った。受け入れるかどうかを判断し、受け入れる場合は帰宅困難者カードの左上にある3桁の数字に対応した帰宅困難者コマを受入施設（教室や体育館アリーナなど）に並べていった。カードをめくるタイミングは参加者に委ねた。今回のチームでは最終的に帰宅困難者カード108枚（全カードの半数）について対応した。

帰宅困難者を受け入れる

- 配布した「帰宅困難者カード」をめくり、施設での対応を考える。
- 受け入れた帰宅困難者に対応する「帰宅困難者コマ」を施設内レイアウトに基づき配置する。帰宅困難者カードは名簿として整理し共有する。
- 施設内に入りきらない場合には、受入を断るか、施設内のレイアウトを変更する等に対応する。

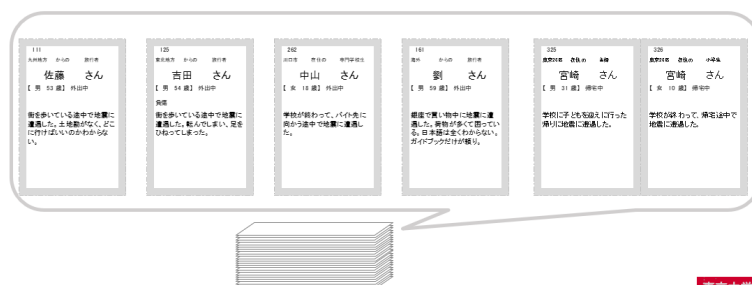


図 4-6-10 帰宅困難者の受け入れについて提示したスライド

東京大学産学共同研究センター、SOMPO-RM

4) イベントへの対応 施設内外で起こるさまざまなイベントやトラブルについて、ファシリテーターがイベント発生のたびに本部にイベントカードを提示した(図4-6-11)。イベントの提示は、3) 帰宅困難者の受け入れ作業と並行して行われた。また、5) 施設の閉鎖までの時間状況の変化を示すため、例えば夕方であれば「16:10」、夜であれば「23:35」の文字盤をスクリーンに「只今の時間」として提示し、時間経過の目安となるようにした。

32枚あるカードのうち、どのカードを提示するかはファシリテーターが選定した。提示したイベントカードは13枚であった(下記「提示したイベントカード」を参照)。提示するイベントは先に決定した役割分担、受入基本方針、また経過時間に沿うよう考慮した。参加者はイベントが提示されるたびにチーム内で話し合いを行い、チーム内でどのように対処するかと決定した。決定内容は付せんには書き込み、該当するイベントカードに貼り付けた。

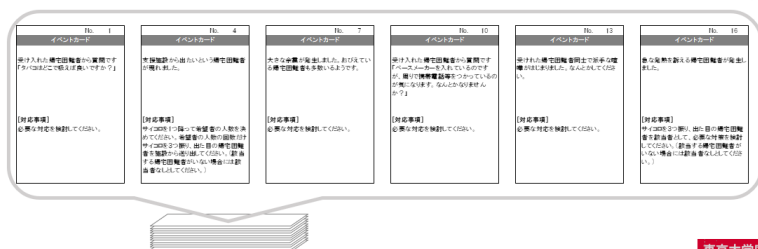
イベントへ対応する

- 進行担当が「**イベントカード**」をめくりますので、「対応事項」の内容を検討してください。(1イベント約4~5分)

(注)進行担当がない場合には各班でめくります。

- 進行担当が対象者や対象人数を決めていますので、対象者を考慮して検討してください。

(注)進行担当がない場合には、サイコロを振って該当者を決めます。該当者がいない場合には「該当者なし」とします。)



東京大学廣井研究室、SOMP0-RM

図 4-6-11 イベントへの対応について提示したスライド

提示したイベントカード(イベント内容を要約したもの)

- ・ No. 6 家族と連絡を取る手段について知りたい(帰宅困難者からの質問)
- ・ No. 7 大きな余震が発生。おびえている帰宅困難者も多数いる
- ・ No. 8 薬を調達できないか(糖尿病の持病がある帰宅困難者からの質問)
- ・ No. 9 手当してほしい(施設内で転んで擦り剥き出血した帰宅困難者からの申し出)
- ・ No. 10 周りで携帯電話を使っているのが気になる(ペースメーカーの利用者からの質問)
- ・ No. 13 帰宅困難者同士で喧嘩が始まった。なんとかしてほしい(帰宅困難者からの質問)
- ・ No. 15 トイレが満員でどうすればよいか(帰宅困難者からの質問)
- ・ No. 16 急な発熱を訴える帰宅困難者が発生。
- ・ No. 18 仮眠を取りたいが周りに男性がいると落ち着いて眠れない(帰宅困難者女性からの質問)
- ・ No. 19 水がなくなったのもっとほしい(帰宅困難者からの質問)
- ・ No. 22 受け入れた帰宅困難者の個人情報提供依頼(区対策本部からの連絡)
- ・ No. 28 急な気温低下で震えている帰宅困難者もいる
- ・ No. 32 子ども用の粉ミルクを溶かすためのお湯はどこで入手できるか(帰宅困難者からの質問)

5) 施設の閉鎖 実施予定時間を迎えたところで「翌朝」を迎えたことを伝え、施設を閉鎖するよう指示して KUG を終了した (図 4-6-12)。

施設を閉鎖する

- (翌朝になりましたので)施設の閉鎖に向けて、その時点で施設内にいる帰宅困難者への対応を検討してください。
- 施設内にいる帰宅困難者への対応の検討が終わった時点で、施設を閉鎖します。
- ゲーム終了です。

■ <参考>現在の状況

項目	想定
鉄道	✓ 1都3県の鉄道各社は、ほぼ全線で運転を見合わせている。 ✓ 震度6弱以上の地域では、2～3日は運転再開は難しい。 ✓ 政府はバスによる代替交通手段の確保を検討中(時期は未定)
ライフライン	✓ 都心部を中心に広域で停電、断水が続いている。 ✓ 固定電話、携帯電話とも通話はつながりにくい。 ✓ 携帯メールは送信できるが、届くまでに時間がかかっている。 ✓ LINE、facebookなどのSNSはつながっている。

東京大学廣井研究室、SOMPO-RM

図 4-6- 12 施設の閉鎖について提示したスライド

6. アンケート回答 (10 分) 休憩後、Google フォームによるアンケートを QR コードで提示し、各自スマートフォンで回答するように求めた。

7. ふりかえり (40 分) グループ内で KUG のふりかえりを行った。ファシリテーターから検討するテーマとして「施設運営の役割分担」「受け入れた帰宅困難者への対応」「イベントへの対応」のフェーズに焦点を当てるよう教示した (図 4-6-13)。今回は 1 グループで実施したため、ホワイトボードにまとめた上で、各自感想コメントを発表するよう求めた。

KUGのふりかえり (25分)

- 気づきの共有
 - ゲームを振り返って、各自が得た“気づき”を、グループ内で話し合っ
て共有してください。
 - 付せん、ホワイトボードを使ってまとめ、最後の5分で発表してくださ
い。
- ふりかえりでの検討テーマ (例)
 - 施設運営の役割分担
 - 受け入れた帰宅困難者への対応
 - イベントへの対応
- ゲームの内容



図 4-6-13 ふりかえりについて提示したスライド

ふりかえりで整理した内容として、「施設運営の役割分担」については“素早く決まった”“統括は経験者が良いかも”“役割が各々に合っていた”などの意見があげられていた。

「受け入れた帰宅困難者への対応」「イベントへの対応」については“受け入れ基準が良かった”“細かく設定できた”“受け入れ有無の判断が早かった”“ケガの重要度で分ける点は使用しないかも知れないが重要”“(受入施設である) 講堂のイメージがつかめなかった”“発熱用の別室を用意の方がよい”“指定の避難所以外の取り扱いについて確認”“近隣施設の情報を入れておくことが重要 (ex. つまっこ広場)”“施設について知っておいた方がよい (耐震とか築年数)”“薬とか病院の対応が課題 (各大学の保健室にあるものを把握する)”“他大学との情報交換の共有、コミュニティの形成 (オープンチャット等の活用)”“リストを作る (受け入れ者リスト等)”“施設の利用状況が分かるものがあったらよい”“各部屋に担当者がいた方がよい”“トイレのルールを決める必要がある (通常は簡易トイレと薬を使って処理する。配管次第では使用しない方がよい)”“トイレに限らず独自のルールを設定した方がよい”などがあげられた。

4. まとめ

昨年度に続き、本学でKUGを実施した。今年度は1グループによるものであったが、グループサイズが8名と前回よりも多く、また構成されたメンバーが学生・職員・地域住民とさまざまである点が大きな違いであった。

実施内容は前回の内容をほぼ踏襲したが、施設見学では備蓄品が梱包された段ボールを持ち上げてみるなど、搬出する際のイメージを持ってもらえるようにした点が新たに加わっていた。また、イベントカードの提示はファシリテーターが帰宅困難者の受け入れ状況を見ながら発生させていた。今回のチームは役割分担が明確で凝集性も高く、決定に至るまでの議論がスムーズであった。

ふりかえりにあげられた点から、KUGの内容や今後の実施に活用できる視点が多くみられた。参加者にはKUGに複数回参加した者や防災に関心があり率先して実践している者が参加しており、これまでの経験をKUGの場でも活かしていた。KUGを実施する際、アイスブレイクを含め個々の強みや経験を共有し、自分たちに見合ったチームづくりをしてから取り組むことで、自己効力感やチームとしての達成感を高めることにつながり、地域防災に役立つ経験に活かされることが示唆された。

引用文献

廣井悠・黒目剛・新藤淳 (2015) . 帰宅困難者支援施設運営ゲームの開発に関する研究, 東日本大震災連続ワークショップ論文集, 地域安全学会 : 1-4.

東京都総務局総合防災部 (2023) . STAY for SAFETY『帰らない』選択が、あなたを守る (都民のみなさん向け詳細版) 東京都総務局総合防災部チャンネル

< <https://www.youtube.com/watch?v=zhNkq37YB5A> > (2024年2月21日)

第7節 KUG実施に関するアンケート結果

堀 洋元（大妻女子大学 人間関係学部）

1. はじめに

昨年度実施したKUGは学生と教職員を対象として、大学内の人的資源を用いて帰宅困難者支援施設を運営することを想定したものであった。しかしながら、日頃から地域との連携を視野に入れて活動することで、学外の人的資源を活用した帰宅困難者支援施設の運営が可能になる。そこで本節では地域との連携を見据えてKUGを実施することで、帰宅困難者支援施設としての備えを高め、施設ごとに実用的なKUGを開発することを目的とした。

2. 方法

本節で用いたデータは、二松学舎大学（2023年12月実施）、大妻女子大学（2024年2月実施）および東京家政学院大学（2024年2月実施）により行われたKUGを対象とした。分析対象は32名（平均年齢：38.69歳、性別：男性14名、女性17名、不明1名、居住形態：家族と同居28名、ひとり暮らし4名、ボランティア活動経験：あり20名、なし12名、身分：学生7名、教職員9名、地域住民6名、その他1名、不明9名）であった。

質問内容は昨年度の教職員および学生を対象としたKUGと同じもの（下記①～④）および⑤個人属性項目（性別、居住形態、ボランティア活動の参加経験）を使用した。

質問内容

- ①松井他（2005）や元吉他（2006）によるSTEP実施後の評価（11項目：“1 全くあてはまらない”から“5 よくあてはまる”までの5段階評定）
- ②伊藤（2022）で使用されたKUG評価項目（7項目：“1 全くそう思わない”から“5 強くそう思う”までの5段階評定；ただし項目により評定ラベルが異なる）
- ③島崎・尾関（2017）による防災意識尺度（20項目：“1 全くあてはまらない”から“6 とてもよくあてはまる”までの6段階評定；被災状況に対する想像力、災害に対する危機感、他者指向性、災害に対する関心、不安の5下位尺度から構成）
- ④今回実施したKUGの改善点（自由記述による回答）

実施・回答方法

説明文書をスライドで提示し、回答はGoogle フォームを使用して行われた。回答時間は5～10分程度であった。

3. 結果

1 図上演習ツールとしての効果測定 松井他（2005）や元吉他（2006）でSTEP実施後に使用された11項目の平均値を表4-7-1に示す。「1-7 防災教育に役立つと思う」「1-10 学ぶことが多かった」「1-1 興味深かった」「1-11 参加意欲がわいた」の順で平均値が高く、「時間が長く感じた」「退屈した」の平均値が低かった。元吉他（2006）での実施後と比較すると、学生データの平均値の高い項目は同様であった。さらに、昨年度実施したデータとの比較を行うため、対応のないt検定を行った。

その結果、「1-3 やり方はよく分かった」は今年度の方が昨年度よりも 5%水準で有意に平均値が高く、「1-6 時間が長く感じた」「1-2 退屈した」は今年度の方が昨年度よりも 5%水準で有意に平均値が低かった。このことから、今年度実施した KUG は表 4-7-1 による項目では概ね昨年度と同じ評価であるが、やり方や時間の長さ、退屈さにおいてはより良い評価が得られた。このことから、KUG の実施は参加者から好意的な評価を得ているといえ、図上演習ツールとしての有効性が示唆された。

表4-7-1 実施後の評価の基礎統計量、および昨年度データとの比較（対応のないt検定）

変数名	N	平均値	標準偏差	最小値	最大値	t検定
1-7. 防災教育に役立つと思う	32	4.84	0.37	4	5	n.s.
1-10. 学ぶことが多かった	32	4.81	0.40	4	5	n.s.
1-1. 興味深かった	32	4.78	0.75	1	5	n.s.
1-11. 参加意欲がわいた	32	4.63	0.55	3	5	n.s.
1-3. やり方はよく分かった	32	4.34	0.75	3	5	*
1-5. もっとやりたかった	32	4.25	0.80	2	5	n.s.
1-8. 現実味があった	32	4.19	0.78	3	5	n.s.
1-9. 実際はこんなものではないと思った	32	3.81	0.90	2	5	n.s.
1-4. 難しかった	32	3.38	1.04	1	5	n.s.
1-6. 時間が長く感じた	32	1.50	0.62	1	3	**
1-2. 退屈した	32	1.28	0.52	1	3	*

2 伊藤（2022）による KUG 評価項目を用いた効果測定 伊藤（2022）で実施した大学生および教職員対象の KUG での 7 項目を表 4-7-2 に示す。7 項目とも肯定的な回答が多くを占めていた。とくに「2-3 KUG は、大学の帰宅困難者対策に取り組む教職員や学生にとって、有意義な教材である」「2-5 KUG のような一時帰宅困難者受入施設の運営訓練は今後必要である」「2-4 キャンパス近隣の民間企業の社員や大学教職員、学生など帰宅困難者対策や支援に関心のある方々に KUG への参加を薦めたい」「2-6 KUG のような一時帰宅困難者受け入れ施設としての運営訓練があれば、今後も参加したい」の平均値が高かった。さらに、昨年度実施したデータとの比較を行うため、対応のない t 検定を行ったところ、いずれの項目とも有意差がみられなかった。

表4-7-2 KUG評価項目の基礎統計量、および昨年度データとの比較（対応のないt検定）

変数名	有効N	平均値	標準偏差	最小値	最大値	t検定
2-3. KUGは、大学の帰宅困難者対策に取り組む教職員や学生にとって、有意義な教材だと思いますか？	32	4.75	0.44	4	5	n.s.
2-5. KUGのような一時帰宅困難者受け入れ施設を運営訓練は今後必要だと思いますか？	32	4.75	0.44	4	5	n.s.
2-4. キャンパス近隣の民間企業の社員や大学教職員、学生など帰宅困難者対策や支援に関心のある方々にKUGへの参加を薦めたいと思いますか？	32	4.50	0.57	3	5	n.s.
2-7. 大規模自然災害後の安全が確認されている場合、学生が帰宅困難者の支援に貢献できると思いますか？	32	4.38	0.61	3	5	n.s.
2-6. KUGのような一時帰宅困難者受け入れ施設としての運営訓練があれば、今後も参加したいですか？	32	4.34	0.55	3	5	n.s.
2-2. 大学生の防災対策および帰宅困難者支援対策の課題について、自らの経験に基づく振り返りができた（できる）と思いますか？	31	4.19	0.70	2	5	n.s.
2-1. KUGを体験した大学生は、帰宅困難者一時滞在施設が必要とする支援への協力を行えると思いますか？	31	4.16	0.73	2	5	n.s.

3 KUG実施後の防災意識尺度得点 KUG 実施後に測定した防災意識尺度（島崎・尾関，2017）の基礎統計量を表 4-7-3 に示す。質問項目の左側に下位尺度名を示した。下位尺度のうち「災害に対する関心」は逆転項目として再計算を行った。「4-6 ひとたび災害が起きれば、大変なことになると思う（災害危機感）」「4-12 災害は明日来てもおかしくない（災害危機感）」「4-17 防災は自分の地域だけで完結するのではなく、他の地域との連携も必要だと思う（災害危機感）」「4-15 災害対策は耐震補強や防波堤の整備など物理的なものだけで充分だと思う（災害関心）」の4項目は平均値が5点台を示しており、いずれも災害危機感の下位尺度項目であった。ついで「4-20 他の人のために何かしたいと思う（他者指向性）」「4-13 個人の努力だけで災害の被害を減らすことは難しいと思う（災害危機感）」「4-2 自分の利益にならないことはやりたくない（災害関心）」平均値が高かった。全体的に肯定的な回答を示しているが、その中でも「災害危機感」や「災害関心」「他者指向性」の下位尺度項目の平均値が高かった。さらに、昨年度実施したデータとの比較を行うため、対応のない検定を行ったところ、いずれの項目とも有意差がみられなかった。

表4-7-3 防災意識尺度17項目の基礎統計量

下位尺度名	項目	N	平均値	標準偏差	最小値	最大値	t検定
災害危機感	4-6、ひとたび災害が起きれば、大変なことになると思う	32	5.63	0.49	5	6	n.s.
災害危機感	4-12、災害は明日来てもおかしくない	32	5.56	0.67	4	6	n.s.
災害危機感	4-17、防災は自分の地域だけで完結するのではなく、他の地域との連携も必要だと思う	32	5.34	0.79	4	6	n.s.
災害関心	4-15、災害対策は耐震補強や防波堤の整備など物理的なものだけで充分だと思う（逆転項目）	32	5.28	0.99	2	6	n.s.
他者指向性	4-20、他の人のために何かしたいと思う	32	4.66	0.75	4	6	n.s.
災害危機感	4-13、個人の努力だけで災害の被害を減らすことは難しいと思う	32	4.63	1.31	1	6	n.s.
災害関心	4-2、自分の利益にならないことはやりたくない（逆転項目）	32	4.53	0.88	3	6	n.s.
他者指向性	4-4、いろいろな友だちをたくさん作りたい	32	4.44	1.13	1	6	n.s.
不安	4-7、自分は心配性だと思う	32	4.25	1.16	2	6	n.s.
他者指向性	4-16、人とコミュニケーションを取るのが好きだ	32	4.25	1.11	1	6	n.s.
不安	4-10、災害の事を考え始めると、様々なパターンの被害を妄想してしまう	32	4.19	1.03	2	6	n.s.
被災想像力	4-3、災害発生時に必要となる物資の具体的なイメージがある	32	4.13	0.79	2	5	n.s.
災害関心	4-11、普段は災害のことは考えない（逆転項目）	32	4.09	1.15	2	6	n.s.
不安	4-14、身の周りの危険をいつも気にしている	32	4.06	0.98	2	6	n.s.
不安	4-8、不安を感じることが多い	32	4.03	1.23	1	6	n.s.
被災想像力	4-1、災害発生時に人々がどのような行動を取るか具体的なイメージがある	32	3.94	1.08	2	6	n.s.
被災想像力	4-5、災害発生時に町がどうなるかの具体的なイメージがある	32	3.75	1.05	1	6	n.s.
被災想像力	4-19、災害発生時に自分がどのような対応をすればよいか具体的なイメージがある	32	3.72	1.05	1	6	n.s.
他者指向性	4-18、人が集まる場所が好きだ	32	3.59	0.87	2	6	n.s.
災害関心	4-9、自分の身近なところで起きそうなことを考える（逆転項目）	32	3.53	1.05	1	5	n.s.

4 今回実施したKUGの改善点 今回実施したKUGの改善点について、自由記述で回答を求め、回答者の属性別に一覧に整理した（表 4-7-4）。

地域の方からの回答には、「カードの文字が小さくて（他の）参加者との共有が難しい」「各カード等の文字が小さくて見づらかった」など、KUGキットの見やすさを指摘する声がみられた。また、帰宅困難者カードについて「人物の設定をもう少し具体的に」や「旅行者など偏った想定だった」などの意見がみられた。

教職員からは「日時や天候など、外的な要因について設定するか各自で設定するよう明示する必要がある」や「備蓄や施設の耐震性等の事前設定があってもよい」「受け入れ方針にそぐわない人を弾くことが簡単にできるのか？区の施設や他大学の帰宅困難者支援施設と連携することも視野に入れたKUGのスキームが必要」「定期的実施の方がよい」などの意見がみられた。

学生からは「カードの文字が小さく見えにくい」「KUGの体験に要する時間が短い」「避難施設と帰宅困難者受入施設は別であること、受入条件があることを防災知識として皆が持つべき」「KUGを行う前にアイスブレイクを行うこと」などの意見がみられた。

その他の参加者による意見は表 4-7-4 を参照。

表4-7-4 今回実施したKUGの改善点（回答者の属性別）

地域の方（*N*=5）

- ・カードの文字が小さくて参加者との共有が困難な点（70代・男性）
- ・少数意見かと思いますが、各カード等の文字が小さくて老眼症状の者にとっては見づらかった（50代・男性）
- ・人物の設定をもう少し具体的にされた方がわかりやすい（50代・女性）
- ・時間が少なかったので全対象を確認できなかったが、旅行者など偏った想定だったため、もう少し現実的に近隣住民などを想定できるとよいと思う（60代・女性）
- ・時間が短くて体験が不十分で、改善点までは判断できない（60代・女性）

教職員（*N*=7）

- ・日時や天候など、外的な要因について事前に設定するか、各般で設定するよう明示するかが必要と感じました（50代・男性）
- ・備蓄がどのくらいあるのか、施設がどのような耐震性を持っているのか等の事前情報があっても良かったように感じる（20代・男性）
- ・受け入れ方針にそぐわない人を弾くことが簡単にできるのか？区の施設や他大学（千代田区キャンパスコンソ参画大学）の帰宅困難者支援施設と連携することも視野に入れたKUGのスキームがあるとよりリアルな体験ができるのではないかと思います。

帰宅困難者を他大学に回す場合のタイムラグをどのように表現するか？他大学でも時間の経過と共に帰宅困難者を受け入れているため、どのように移動してくる帰宅困難者を受け入れるのか？等を織り込んでシミュレーションする仕掛けを講じることができるとゲーム性も上がって、楽しみながらも思考を巡らすことが求められるようなゲームにアップデートできるのではないかと思います（40代・男性）

- ・たくさんあるので、先生に直接お伝えします（60代・男性）
- ・定期的に実施する方が良いと考えます（50代・女性）
- ・時間が足りないのが、残念でした（50代・女性）
- ・特にありません（50代・女性）

学生（*N*=4）

- ・カードの文字が小さくて少し見えにくい気がした（20代・女性）
- ・KUGの体験に要する時間が不十分であったと感じた。話し合いをより有意義にするために時間の確保が必要だと思った。また、学生の参加率を挙げることでさらに有意義な活動になるのではないかと感じた（20代・男性）
- ・避難施設と帰宅困難者受入施設は別であるものということ、受入条件があることを防災知識として皆がもつべきだと感じた。そのため、活動をしっかり発信して行けたらいいと思った（20代・女性）
- ・KUGを始める前に何かしらの話題を元にアイスブレイクを行うことでスムーズな話し合いができると感じた。（開催者側が事前に話題を決めておく）
細かいがKUGの具体的な内容を説明した後に同意書を書くべきだと感じた（20代・男性）

その他（*N*=7）

- ・もう少し施設の条件にあったイベントカードがあれば良かったなあと思いました（女性）
- ・避難物資の実物を実際に見れるようにして欲しい。例テント、携帯トイレ（20代・女性）
- ・帰宅困難者のカード、対応するのは少しかたい気がします（20代・男性）
- ・実施前に説明用の動画視聴時間があると良いと思いました（30代・男性）
- ・こうした機会を継続することの大切さを学びました。ゲームの目的はよく理解できましたが、ゲームを始める前にもう少し進め方についての説明があると、よりわかりやすいものになったと思いました（50代・男性）
- ・初めて参加したので改善点に気づくこともなく没頭していました（50代・男性）
- ・特になし（20代）

4. 考察

1 図上演習ツールとしての実用性 図上演習ツールとしての効果測定やKUG評価項目による結果（結果1および2）から、参加者は今回実施したKUGの有効性や有用性を感じており、自身にとっても動機づけが高まる体験であることが示された。また、昨年度データとの比較から、今年度の参加者は一部の項目では昨年度と同等かそれ以上の効果を得ていることが示された。参加者への有効性だけでなく、ゲーム内容の改善やファシリテーターが経験を積むことによってより円滑にゲームを実施できている可能性がある。

2 KUG実施後の防災意識 昨年度と同様に、防災意識尺度の下位尺度のうち、災害に対する危機感や災害に対する関心、他者指向性に関する項目が相対的に高かったことから、災害や防災を自分ごととしてとらえている項目への反応が得られていることが明らかになった（結果3）。今年度の参加者にはKUGに複数回参加している者や地域での防災活動に積極的な参加者が含まれており、防災意識のベースラインが相対的に高い参加者だった可能性がある。KUGの実施によって一時的に高まるのか維持されていくのか、要因を整理して検討していく必要がある。

3 今回実施したKUGの改善点 参加者による自由記述内容から、KUGに用いる材料や実施手続き、提示する内容を改善することで、より現実的で実用的な図上演習ツールになり得ることが示唆された（結果4）。ファシリテーターだけでなく参加者も複数回参加することによって経験値が上がり、さまざまな局面で対応できることになる。また、実施してうまくいかなかったことを次の機会に対処することによって効力感も高まると考えられる。“図上での防災訓練”としてKUGを継続的に実施することで個々の対応力やチームとしての凝集性、地域としてのつながりが強化されることになるであろう。

5. 引用文献

- 伊藤マモル（2022）学生及び職員による KUG（モデル校：法政大学）の学習体験，自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究（1）学生版 KUG（帰宅困難者支援施設運営ゲーム）の開発報告書，千代田区キャンパスコンソ，53-67.
- 松井豊・竹中一平・新井洋輔・水田恵三・西道実・清水裕・田中優・福岡欣治・元吉忠寛・堀洋元（2005）広域災害における避難所運営訓練システム（STEP）の開発過程と効果検証，筑波大学心理学研究，30，43-49.
- 元吉忠寛・松井豊・竹中一平・新井洋輔・水田恵三・西道実・清水裕・田中優・福岡欣治・堀洋元（2006）広域災害における避難所運営訓練システムの構築と防災教育の効果に関する実験的研究，地域安全学会論文集，7，425-431.
- 島崎敢・尾関美喜（2017）防災意識尺度の作成（1），日本心理学会第81回大会論文集，69.

補注

本研究は大妻女子大学生命科学研究倫理委員会の承認を得て実施された（受付番号 04-021）。



まとめと今後の展望

SUMMARY AND
FUTURE PROSPECTS

まとめと今後の展望

令和5年度は、「自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究(3) 地域連携を視野に入れた帰宅困難者支援施設運営ゲームの開発」と題して、学際的な共同研究事業をすすめ、下記の3点の成果を得ることができた。

第1点として、千代田区における過去の自然災害記録の教材化とワークショップの実施である。今年は、関東大震災(1923年)が発生してちょうど100年目にあたることから、震災時の千代田区における証言・映像の収集と分析を行った。具体的には、『大正大震災大火災』(大日本雄弁会講談社、1923年)、『東京市立小學校兒童震災記念文集』(東京市学務課、1924年)など、当時発行された文献の中から千代田区域に関連する内容を抽出し、分析を行った。さらに、国立映画アーカイブ所蔵の映像(関東大震災映像デジタルアーカイブ：<https://kantodaishinsai.filmarchives.jp/>)から千代田区域に関連するものを抽出し、文献や震災絵葉書との照合、分析などを行った。これらの成果を公表するために、「企画展「千代田区における過去の自然災害～安政大地震と関東大震災～」の開催や、千代田区域における関東大震災の古写真(絵はがき)を収集した「関東大震災100年」パネル展示を実施した。開催にあたっては、学生による展示プロジェクトチームを結成したことが、展覧会の企画・立案から実施までが防災意識の育成につながったと考えられる。

こうした千代田区の過去の災害を基に、ウィキペディア記事執筆ワークショップも実施された。災害についての学びの機会を生み出していくことを狙ってきた。今回は、特定の場所や建物ではなく、「神田の大火」という広範な影響を巻き起こした災害という事柄を対象とし、「神田の大火」で焼失した範囲を1時間弱の時間をかけて、延々と焼失範囲に沿って歩くという経験ができた。これは、「災害」による影響を再確認すると同時に、日本の近代化というとても大きな歴史的文脈を垣間見ることができた。「神田の大火」という大きな看板の影で、実際に被害を受け、右往左往しながらも復興のために動いていった生きた人間の存在に気づき、想像力を養う機会となった。

第2点としては、防災に必要な情報・備蓄品等のアーカイブ化をすすめることができたことである。学生が「災害時の栄養・食生活に備える」防災教育の視点を盛り込んだ栄養教育の実践力を養うための動画教材を作成した。その動画コンテンツの分析から、若年成人の視点からの動画のニーズを分析することができた。その内容みると、一般家庭を対象としたものもあったが、妊婦・授乳婦、乳幼児をもつ親、そして高齢者等の要配慮者、食物アレルギーをもつ方も視野にいれて作成されており、こうした方が自主的に防災・減災のための対策をするためにも、また、帰宅困難者となり一時滞在施設として支援をするためにも、動画等での情報提供の必要性が提示された。

さらに、災害時に役立つ簡単クッキング方法も検討された。備蓄食品を用いてなるべく多くの食品を摂取できるような料理を考案し、15品の料理について学生実習を行い、実習前後のアンケート調査により備蓄食品に対する意識の変容が調べられた。備蓄食品を用いた15品の料理を考え学生実習を行った結果、実習後には、米(精白米・無洗米)、乾麺(そうめん・うどん・パスタ)を備蓄するという割合が増加し、特に乾物(切り干し大根・わかめ等)は90%と実習前の9倍になり、米や乾麺、乾物等を備蓄して料理するという意識が高まり、備蓄する食品や備蓄食品に対する意識に変容がみられた。災害時の食事については、平時より災害時の栄養・

食生活の基本等について情報を得て、防災意識を醸成しておくことが大切であり、ローリングストックなど教育現場において災害時の視点から見た食教育を行うことは、被災時の食を支える上で重要であることが示され、伝承の重要性が再認識された。

第3点としては、帰宅困難者支援施設運営ゲーム（KUG）を、地域と連携しながら、5大学において開発・実施することができた。一例として、法政大学では、帰宅困難者一時滞在施設に関する問題の解決に資する提言を学生が主体的にまとめることを目的に、災害発生時をシミュレーションしたキャンパス施設内での宿泊体験実習（＝防災キャンプ）、およびKUGを通じた帰宅困難者一時滞在施設を運営するための改善策を検討するプロジェクト活動ができた。一時滞在施設の「運営者側の立場」と「帰宅困難者である利用者の立場」という二つの異なる観点から見えてくる問題や、「学生としての帰宅困難者の立場（講義中の教室や学内施設における過ごし方）」と「学外者としての帰宅困難者の立場（本学の市ヶ谷総合体育館における所定の場所での過ごし方）」の違いなどから生じる多岐にわたる問題に対して、グループワークを通じて段階的に取り組み、対処していた。学生は、これらの問題に付随して予測される問題が広大無辺に広がっていくことも認識しつつ、それらの問題に取り組んだ結果として、複眼的な目を養う効果を得られたことが期待された。さらに、これらの成果から、帰宅困難者一時滞在施設の受入に備えたアクションが作成された。その内容は「緊急地震速報が鳴った時の対応」、「揺れが収まってからの対応」では①帰宅困難者の受入れ準備の発令、②帰宅困難者の受入れ基本方針の確認、③帰宅困難者の受入れ直前、④帰宅困難者の受入れ開始の段階ごとに提案されている。

以上、今年度、それぞれの大学で、千代田区の地域組織・団体と交流を深め、KUGを防災教育の質的向上に資する教材として活用できたことが、学生ボランティアとして避難施設の運営に携わるようになった場合の心構えや対応力を養成することにもつながったと捉えられた。3年間を通して、学生は多様な避難者および避難所で生じる問題を想定し、臨機応変に対応することの困難さを自分事に置き換え、防災行動に対する複眼的な目を養うことでサステナブルな防災意識向上に資する大学教育の在り方を学生とともに探求することができたことが大きな成果である。

次年度、令和6年度も千代田学の共同提案事業として、千代田区キャンパスコンソにおいて研究を深めていくことを計画している。千代田区キャンパスコンソでの単位互換科目として、「課題解決型フィールドワーク～大規模災害自然発生時の大学キャンパスでの避難生活のマネジメントⅠ－千代田キャンパスコンソ及び近隣企業との連携」を開設し、各大学から受講生を募ることで学生災害ボランティアの育成をすすめることを計画している。学生は①大規模自然災害に関する知識を深める、②与えられた課題に対するグループワークによる実習及び演習を中心に、積極的なコミュニケーションを通して、想定される多様な避難者、および、避難所で生じる問題に対して臨機応変に対応することの難しさを共に学び、防災行動に対する複眼的な目を養うことを到達目標としたい。教育内容については、各大学の研究者が参画すると共に、千代田区・災害救援ボランティア推進委員会、千代田区社会福祉協議会、一般社団法人防災教育普及協会、および地域の関係団体、企業等と連携しながら、構築する。その一部には、令和5年度まで研究をすすめてきた各大学のKUGを活用した学習や、研究により得られた知見や解決した問題点などの資料（動画等）を活用していく。各段階で、千代田区の危機管理政策経営担当部門に提供したい。



本研究におきましては、令和3年～5年の3年間にわたり、千代田区より助成を頂き、研究活動が出来ましたことに深く感謝いたしております。これを機に、千代田区の帰宅困難者支援の施策に学び、大学の役割を、教職員が学生と共に語り合い、学びあう機会を持つことができました。防災・減災意識を高めることは、学生・教職員のお互いの命を守ることはもとより、家族、地域と共に、過去を生きてきたこと、また、これから生きていくことへの期待と挑戦となっていくことでしょう。同時に、本研究を通して、千代田区キャンパスコンソの活動自体を強化することができたことも財産となっています。

本研究を進めるにあたり、千代田地域振興部コミュニティ総務課、政策経営部災害対策・危機管理課、千代田保健所健康推進課の皆様には、研究事業の遂行を多面的にご支援いただきました。心より感謝申し上げる次第です。また、私たちの研究活動を支援し続けていただきました関係者の皆様のご理解とご協力に、この場をお借りして深甚の謝意を表したいと存じます。

今後も千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム（千代田区キャンパスコンソ）の活動にご支援・ご指導の程、よろしくお願い申し上げます。

（研究総括・酒井治子）

執筆者（50音順）

伊藤 マモル 法政大学 法学部 教授
(第4章 第1節・第2節)
近藤 壮 共立女子大学 文芸学部 准教授
(第2章 第1節、第4章 第5節)
酒井 治子 東京家政学院大学 人間栄養学部 教授
(第1章、第3章 第1節、第4章 第3節、まとめと今後の展望)
下坂 智恵 大妻女子大学 短期大学部 家政科 教授
(第3章 第2節)
谷島 貫太 二松学舎大学 文学部 准教授
(第2章 第2節、第4章 第4節)
堀 洋元 大妻女子大学 人間関係学部 准教授
(第4章 第6節・第7節)

(所属は2024年3月現在)

令和5年度 「千代田学」に関する区内大学等の事業提案制度 共同事業
自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究
(3)地域連携を視野に入れた帰宅困難者支援施設運営ゲームの開発
報告書

令和6年（2024）3月

「千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム（千代田区キャンパスコンソ）」

幹事校 東京家政学院大学 人間栄養学部 酒井治子

〒102-8341 東京都千代田区三番町 22 番地

Tel:03-3262-2251



千代田区キャンパスコンソ

Chiyoda Campus Consortium